



北陸

七國志

十八

2861
18



2861
18

是
乃

乃

乃

乃

乃

北國全太平記卷之第十八

目錄

山山城守長知為使者參上大坂事

芳春院殿關東下向

先東奧騷動事

利長卿與丹羽加賀守長重不快事

利長卿小松祭向 附軍制事

寺西多尤衛門高名

附京都本國寺七本鍵事

伊
門
號
卷

北國全太平記卷之第十八

明治十六年
十月二十日
購

南部無右衛門尉長原實寶院事

小松城人質

附南部為計實寶院事

北國全太平記卷之第十八

洛下 後学 馬場玄隆信意輯錄

横山山城守長知為使者叅上大坂事

爰ニ羽柴加賀守長重ト申ハ。故丹羽五郎左衛門尉長秀ノ家嫡ニテ。加州小松ニ在城シ。松任四五石。小松八方石。凡テ十二方石ヲ領シ。加賀中納言利長卿トハ。共ニ故信長公ノ眷ナリケルガ。台命ニヨツテ。加州小松ノ城ニ皈リ。利長隱謀コト實ナルニ於テハ。長重先鋒シテ。忠勤ヲ勵ムベシト。一向金沢ノ様ヲノ窺ヒ居ラレケル。利長卿此コトヲ傳ヘ聞大ニ恨ミ憤リ。假令他門ノ者共ハ。讒

言ヲ擗へ。悪サマニ申シ。沈ムルトモ。渠ハ親レキ中
ナレバ。ヨモ余所目ハナルマ。シキヲ却ツテ當家
ヲ窺フコソ。所存尽セヌ処ナリ。殊ニ吾罪ナフレ
テ。隱謀人ノ悪名ヲ蒙リヌルコソ口惜ケレ。讒ヲ
カ指登セテ。此旨ヲ申シ開クベキトテ。其旨ヲ撰
ミ玉ヒケルガ。横山山城守長知ニ勝ル者アルベ
カラストテ。長知ヲ使者トシテ。大坂ニ指上レ玉
ヒケル。横山急キ。大坂ニ馳上リ。西ノ丸ニ登城ス。
徳川家御上檀ニ出御坐セバ。股肱輔翼ノ諸老
臣悉ク列居セラレ。其余ノ人々次第ヲ守ツテ。威
儀嚴重ニ縁側マテ列坐セリ。其トキ長知ヲ召ス。

横山少毛心ヲ動かサズ。御前ニ罷出。此度利長隱
謀ヲ相巧ノ由。讒訴仕ル輩候由。利長ガ一世ノ浮
沈此トキニ候ユヘ。恐レ入テ候ナリ。去年ヨリ以
來屢誓詞ヲ以テ。忠勤ヲ抽ンコトヲ存シ候身ノ。
今更何ユヘニ反心ヲ生ジ候ベキ。察スル処奉行
ノ面々。利長ガ威權ヲ妬ミ。讒レナキ讒ヲ擗ヘテ。
利長ヲ失ント巧メルニテゾ候ラン。利長素ヨリ
下言ノ約ヲモ曾テ以テ違ヘタルコト候ハズ。只
君ノ御賢察ヲ以テ。讒者ノ實否ヲ御糺シアツ
テ賜ハルベキ旨。申し含メ候ト言上レテ。利長卿
ヨリノ。下封ノ書ヲ指上ル。然レドモ 徳川家御

氣色アシク見ヘテ。彼書ヲモ上覽ナシ。其トキ長
 知平シキシナガテ。願ハクハ利長ガ書ヲ上覽アツ
 テ。真偽ヲ御総シナサレ下サルベシト言上ス。時
 ニ 徳川家彼書ヲ披キ上覽アツテ。何トテ誓詞
 ハナキニヤト上意アル。山城守承リ。サン候去年
 ヨリ。教誓書ヲ指上候上ハ。利長ニ於テ何人異心
 カ候ベキ。然レドモ御疑ヒアル上ハ。今更百千牧
 ノ誓詞ヲ指上ケ候トモ。益ナキ処ニテ候ト。專異
 心ナキ旨。詞ヲ尽シ言上シケレバ。御前ニアリ合
 人々。皆横山ガ。氣力辨オノ程ヲゾ感シケル。
 徳川家御感稱ナサレ。汝ガ申旨ニヨツテ。吾疑心

ヲ散ジタリ。此ウヘハ芳春院利長ノ母ノヲ贊トシテ。
 大坂ニ指上スベシ。然ラバ世ノ浮説モ。自ラ止ベ
 キゾト上意アレバ。長知拜謝シテ。御前ヲ立ニケ
 リ。斯テ加州ニ飯国シテ。金沢ノ城ニ登リ。右ノ次
 第ヲ申上ケ、レバ。利長卿。長知ガ君命ヲ辱メサ
 ルコトヲ感ジ。殊ニ 徳川家ノ御疑心頓ニ散ジ
 ケレバ。悦ヒ玉フコト限リナシ。是ニヨリテ母公
 芳春院殿ニ。村井豊後守長頼。山崎長門守長徳ガ
 嫡子。安房守ヲ相添ヘテ。大坂ヘゾ登シ玉ヒケル。
 芳春院殿關東下向 年 東奥騷動事
 然ル処ニ翌年慶長五年五月。芳春院ヲ武州江戸ニ指

下サルヘキ由ヲ命セサセ玉フ。利長卿命ニ從ヒ。母君ヲ江戸ヘ指下シ玉フベキニ究マリシカバ。同キ十九日村井豊後守。山崎安房守以下。芳春院殿ノ御供シ。伏見ヲ立テ。關東ニ赴キケルガ。程ケク六月七日。武州江戸ニゾ著ニケル。然ルニ東國ノ上杉。逆心ノ聞ヘアリシカバ。徳川家自ラ御進發アツテ。御征伐アルベシトテ。其軍例ヲ定メシメ玉フ。白川口會津ヨリ二十里ヲ隔ツハ。徳川家御兩君。信夫口ハ。大崎少將正宗伊達ヨリ。朱沢口ハ會津ヨリ二十里ヲ隔ツ。家上出羽守義光。津川口ハ。加賀中納言利長卿。堀久太即秀治。村上周防守。溝口出雲守ト定メ

レメ玉ヒ。七月二十一日。追手權手一同ニ。乱入スベキ旨仰付サセラレ。六月十六日。大坂ヲ首途アツテ。伏見ニ暫ク御滯座アリ。同キ十八日。伏見ノ城ヲ出御アリ。關東ニ御進發アル。供奉ノ人々ニハ。福嶋左衛門。大夫正則。其子刑部太輔正元。次男掃部頭正頼。池田三左衛門尉輝政。同備中守長吉。細川越中守忠與。其子與市忠隆。筒井伊賀守定次。淺野左京大夫幸長。田中兵部少輔吉政。嫡子民部少輔長頭堀尾信濃。守忠氏。山内對馬守一豊有馬。玄番頭豊氏。中村彦左衛門尉一栄式部太輔弟。藤堂佐渡守高虎。加藤左馬助嘉明。黒田甲斐守長政。蜂

須賀長門守家政。生駒讚岐守一正。寺沢志摩守廣高。富田信濃守吉高。古田兵部少輔信勝。稻葉藏人。道通。織田源五入道有樂。其子河内守長孝。金森出雲守可重入道法印子。九鬼長門守守隆分都。左京亮光信。小出遠江守吉晨市橋。下總守昌成。德永左馬助。桑山相模守。龜井武藏守。茲經。石河伊豆守。船越五郎右衛門尉。佐々淡路守。池田備後守。天野周防守。佐藤三川守。佐久間河内守。三好入道為三。同新右衛門尉。津田小平太。神保長三郎。水野河内守。秋山右近。太夫中川半左衛門尉。丹羽勘介氏次。鈴木越中守兼松。又四郎長谷川甚兵衛尉。森總兵衛尉。柘植平右衛門尉。別前孫次郎。村越兵庫頭。山岡道阿弥以下。其外追々ニ御跡ヨリ。東国ニ馳下ル勢引モ切ラズ。夥シカリシ夏トモナリ。

利長卿與丹羽加賀守長重不快事

中納言利長卿ハ。加州金沢ノ城ニ居玉ヒケルガ。東奥ノ敵徒御退治ノ夕メ。徳川家御進發ニヨツテ。利長卿ハ。津川口ノ先鋒タルベキ旨。仰下サレシカバ。北陸道ノ諸將ニ相觸テ。早速出勢スベシト相催シ玉ヒケルガ。同國小松ノ城主丹羽加賀守長重ノ方ヘモ。右ノ赴ヲゾ觸送リ玉ヒケル。長重是ヲ聞ツク。ト思案シテ。去年利長野心ノ

聞へアリシトキ。親族ノ好ミヲ振り捨テ。余儀ナ
 ク頼マレ奉リ。忠節ニ備ベシナリ。然ル上ハ。東奥
 御征伐ノ御コトハ。天下ノ逆徒ナレバ。誰カイナ
 ミ申スベキ。直ニ御催促ヲ下シ玉ハンスルニ。左
 ナキコソ不審ナレ。此間利長如何ナル。護ヲヤ搦
 へケン。計リガタキ。莫共ナリ。察スルニ。此比ノ形
 勢ヲ遺恨ニ思ヒ。中途ニ方便リ出シテ。討取ント
 ノ術ナルベシ。先暫ラク夕メラヒテ。上方ノヤウ
 ヲモ聞定メテ。コソト思ハレケレバ。仰ニ從ヒ。早
 々打立候ハンスレトモ。所勞ノコト候ヒテ。行歩
 心ニ任セズ候。其上支度モ半ナラス候へハ。其ハ

後陣ヲ仕リ候ベシ。先其ヨリ御出陣候ベシトゾ
 返事シ玉ニケル。利長卿聞玉ヒ。安カラズ思ヒ。イ
 ヤク是モ心得タリ。渠ガ父五郎左衛門尉長秀ハ。
 故信長公ニ仕へテ。股肱輔翼ノ臣ト呼レ。若狭越
 前。加賀半國ヲ領シ。北陸道七ヶ国。出羽ノ国ニ至
 ルニテ。附庸トセシ身ナレド。果報拙キユヘニヤ。
 長秀卒去ノ後。長重幼少ナリシカドモ。父ガ讓リ
 ヲ受ケルガ。幾程ナク。賤セラレテ。今ハ却ツテ某
 ガ催促ニ從ハンコト。本意ナクモアリヌベシ。又
 此比ノ莫兵モ。面目ナク思フベケレバ。如何ナル
 害心ヲヤ搦ムラン。然レバ。渠ヲ後陣ニ打セ。跡ヲ

切ラレテハ叶フミジト。家ノ子。不破齊官助ヲ使
者トシテ。如何ナル御所存候ヒテカ。加様ニ延引
ハシ玉ヒ候ラント。二三度四五度責ラレケル處
ニ。徳川家ノ飛脚小松ニ到來シテ。東奥ノ逆徒
蜂起ノ旨ヲ告サセ玉ヒ。北國ノ儀ヲ頼ミ思召ス
ノ間。粉骨ヲ尽サルベキノ由。御狀ヲ賜ハリシカ
バ。長重拜戴シテ大ニ悦ビ。是コソ魔利支天ノ冥
慮ニ叶ヒ。武運長久ナルベキ證文ナレトテ。深ク
秘府ニ納メ。哀レ誰ニテモ非義ノ族出來リナバ。
一戰ノ中ニ忠心ヲ顯ハサント。義心面ニ浮ンデ
見ヘケル處ニ。齊官助又使者トシテ來リケルガ。

此躰勞ヲ見テ。急キ金沢ニ馳飯リ。小松ノ為休心
得ラレズ候。御油断アルベカラズ候トゾ告タリ
ケル。

利長卿小松發向 附軍制事

利長卿是ヲ聞玉ヒ。大ニ立腹シ。其儀ナラハ去ラ
バ小松ヲ踏散シテ。其ヨリ奥州へ向フベント。專
軍勞ヲ相催シ。能州七尾ノ舍弟侍從利政ノ方へ
モ。夏ノ急ヲ相告ケラル。是互ノ疑心ニヨツテ。計
ラズモ挑戰ニ及ビケル。長重ノ不運ノ程コソ方
見ケレ。是ニヨツテ能登侍從利政ハ。伯父前田五
郎兵衛尉安勝。其子播磨守ヲシテ。七尾ノ城ヲ守

ラシメ。金沢ニ馳来リ玉フ。係ル処ニ江州佐和山ノ
治部、少輔三成迎心ヲ企テ。畿内西國ニ一味ノ輩
多ク出来リ。北國ニモ越前敦賀ノ城主、大谷刑部
少輔吉結、加州大聖寺ノ山口玄蕃、頭宗永等モ逆
徒ニ與シタリト聞ヘシカバ、利長卿兄弟、諸老臣
ヲ集メ、軍儀様々ナリケルガ、越前北庄ノ青木紀
伊守ヲ攻ラルベントテ、五ヶ條ノ軍制ヲ出シテ、
松平久兵衛尉ニ相渡シ玉フ。其文ニ云ク。

- 一 行列之次第不可違定法諸士各可騎組頭之
前若称私用交前後混雜之輩其罪不輕焉
- 一 諸卒不可離組頭之陣營也

- 一 組頭毎日相替當騎前後矣
- 一 搦陣官之者及勤番之輩詐称病或寄事左右
難法之輩於有之者直可達聽焉可其罪當死
也

- 一 至小大不達組頭或妄逃一隊或恣從他頭之
輩最停止之若違背之属其罪應誅焉
- 所定之軍法五條嚴守之勿背戾焉若違背軍
制之族縱雖為隊長可隨其罪也猶亦獻誓辭
勿具負偏頗焉

慶長五年七月二十五日
松平久兵衛トノ

去ニ依テ先國中ノ敵ヲ退治シテ其ヨリ越前ノ敵ニ
向フベシトテ一族前田對馬守長種利長ノ長ニ。越中
富山ノ城ヲ守ラセ。金沢ノ城ニハ叔母督高島石
見守定吉ヲ殘シ置シ。七月二十六日ノ暮程ニ中
納言利長卿舍弟能登守利政。四万余ノ軍勢ヲ引
卒シ。小松表ニ押出サル。野々市ヲ過テ松任ヨリ
アナタハ。小松領ナレバ。焼拂フテ通レヨトテ民
家ヲ焼立テ其明リヲ松明トシテ行程ニ。柏野金
ヨリ福泊。水嶋柏野ヨリヲ押通ツテ。手取川ヲ打
渡リ。寺井ノ里マテ押寄タリ。金沢ヨリ小松マテ
ハ。纒フカ八里ノ路ナレドモ。大軍ノ僻クセナレバ彼此ト

スル中ニサレモニ長キ秋ノ夜モ。早曉ニナリニ
ケリ。寺井ノ郷民共小松ニ走り来リ。じかぐト告
ケレバ。小松ノ諸士上ヲ下ヘト騷動ス。去レドモ
大将丹羽加賀守長重武勇勝スガレタル大将ナレバ
此告ヲ聞ヨリ早ク。掛橋ヘ打テ出。先此所ヲ持固
メテコソ。籠城ノ評議セメトテ。安宅川ノ岸ニ附
テ柵サカ一重結廻ツイシテ。旗火々押立取り合セタル躰
ヲゾ見セタリケル。斯テ金沢方ノ先手ノ營。押寄
ルト等シク攻ントシケルヲ。利長卿下知シテ。総ソウ
搦カヘ一重ヲ破ンコトハ。イト安ク覺ユレドモ。泥
町ヘ打入レトキ。出丸ヨリ弓鉄炮ニテ打立ナハ

味方ハ暗々ト犬死スルヨリ外ハアルマジレ。先
遠卷ニセヨヤトテ。小松ヨリ三里東ナル。木場三
谷ト云フ処ニ。二个所ノ向城ヲ構ヘ。軍勢ヲ手合セ
シテ。横山山城守長知。山崎長門守長徳。入道閑齋
此等二人ノ老臣ヲ指遣ハシ。大将利長卿モ寺井
ノ東ナル。三堂山ニ本陣ヲ居ラレケリ

寺西多左衛門高名。附京都本國寺六本。鍵事
係ル処ニ。丹羽長重ノ長臣。坂井與右衛門尉ガ手
ノ者寺。寺西多左衛門ト云フ大剛ノ者アリケル
ガ。早晚ノ程ニカ抜出ケン。寺井邊ヘ忍ビヨリ。小
屋ドリシ居ケル者共ノ中ヘ會釈モナク馳入テ

手本ニ廻ル者共ヲ薙伏セテ。首ニツ取テ馳取リ
シカバ。大将長重物始メヨシト悦ンテ。寺西ガ働
キモ。主人ガ器量ニ似セテ。甲斐々々シクセシ者
カナトテ。當座ニ引出物ヲソ與ヘラレケル。此坂
井ト云ヘルハ。隠レナキ武功ノ勇士ナリ。去レバ
去ヌル永祿十二年。公方義昭卿。足利。京都六條本
國寺ニ奇宿シ玉ヒケルヲ。三好ガ一族共。不意ニ
押奇攻タリシニ。濃州齊藤家ノ浪人ニ坂井與右
衛門尉。赤座七郎右衛門尉。舍身助六。森五八。奥
村平六。左衛門尉。渡邊勝左衛門尉等。其比ハ濃州
高槻ノ城主。和田伊賀守惟政ニ從ヒ居シガ。早速

本方家ヲ見次奉ラセ。七本鏡ト呼レテ名ヲ奉
レ者共ナリケルガ。坂井ハ其後故丹羽五郎左衛
門尉長秀ニ仕へ。長重ノ代ニナリテハ。家老職ニ
備リテ武功世ニ超ヌレバ。斯慶養セラレシモ理
リナリトゾ覺ヘケル。是ヲ見真似ニ聞傳ヘテ。早
リ雄ノ若武者共。後々ニ忍ビ出テ此彼ノツマリ
クニ隠レ居テ。寄手ノ士卒共ノ。陣具ヲ調ヘ小屋
具ヲ運ブ者共ヲ追立テ。首ヲ取ル程ニ。寄手ニモ
是ヲ怒ツテ伏兵ヲ設ケシト聞ヘシカバイヤク
士卒一人モ大切ナル折節。アヤマチセサセテハ
悪カリナシ。下知モナキニ出ベカラズト。堅夕制

法ヲ置レケリ。此城追手ハ無双ノ切所ニテ寄手
左右ナクカ、リ得ズ。味方モ早ク取合セズ。搦手
ハ浅間ナレバ打廻ルコトモアリヌベシ。敵ノ術
ヲ也又先ニ。此方ヨリ計ヘトテ。惣搦ヘヨリ外ナ
リケル。本折所ト云フ処ヲ。十余町自焼シテ。今ヤ
クト待カケタリ。

南部無右衛門尉長原實寶院事

去程ニ小松勢追手。搦手役所々々ノ手合セシテ
各持口ヲ固メケル程ニ。籠城ノ法ナレバ。人質ヲ
出スベシト相觸テ。諸士ノ人質ヲ取リ固メケ
ル。係ル急ナル其中ニ。可笑キコトコソ出来リタ

レ。其ユヘヲ如何ト尋レバ。南部無右衛門尉ト云
ヘル勇士諸国武者修行シテ廻リケルヲ。稱葉表
六貞道ノ吹拳ニヨツテ。二千石ノ食祿ヲ得サセ
テ召置レケル。此者武勇ニハ達シケレトモ。田夫
野人ノ男ニテ。上下ヲモ分タズ無礼ヲモ顧ス。万
事已ガ心ノマ、ニゾ行跡イケル。妻女ヲハ持ス
シテ。若太夫ト云ヘル。十六七歳ハカリナル子ヲ
養育シケルガ。傍輩ノ中ナントニ。饗膳ノコトア
ルトキハ。人ハ免サバレドモ。養子若太夫ヲ俱息
シテ兼約ノ輩ト打交ハリ。彼所ニ至リ。亭主ニ礼
義ヲモ述ズ。座上ニ無手ト居直リ自余ノ輩ニハ

時宜會秋モセズ。若太夫モ能クベヨナント、云
ヒテ。肴食飽マテ打喰ヒ酒モ醉マテ飲テ。活計シ
テゾ飯リケル去レバ。或トキ家中ノ士。一献ヲ饗
セントテ。大守ヲ請ジ入レタリケルニ。南部聞ツ
ケ。例ノ若太夫ヲ伴ヒ彼許ニ行テ。亭主ニ案内モ
ナク。主人ノ末席ニ伺候シ。寒暖ノ挨拶シテ居タ
リケレハ。亭主モアキレ。扈從ノ士等モ奥醒テソ
見ヘニケル。長重素ヨリ謀オアル將ナレバ。尤ア
ラヌ躰ニテ。南部ガイシクモ察リタリ。是ヘクト
當話セラレシニ。辭退モナク。若太夫ヨ是ヘ察レ
トテ。頗テ對座シテ。養膳思フマ、ニ給テ。イツモ

加様ノ御座席へハ。御供仕リ候べシナンドト、秦
公ダテヲ述ケレバ。皆人目引袖引笑ヒケリ。其コ
トヲ後ニ。長重咄ノ次テニ。アノ南部ト云フ男ハ。
武勇バカリヲ賣ツレバ。行跡ハ買フ者ナレ。世間
ニ隠レナキ。レレ者ヲ。改メテ益ナシ。又武勇ニ於
テハ。ケナゲナル者ナレバ。如何ナル無礼アリト
テモ。見咎ムベカラズト有シカハ。免サレ者ニナ
リテゾ居タリケル。又長原實寶院松雲ト云ヒシ
法師。是モ武者修行ト号シ。諸國ヲ廻リケルガ。北
陸道ヲ通りケルニ。長重招キ寄テ對面シ。昔物語
ナンドヒサセラレケルニ。物ゴト功者ナルコト

多カリケレバ。千石ノ祿ヲ與へ。朝暮ノ同膳ニツ
セラレケル。彼カ氣象南部トハ夏カハリ。一座ノ
奥對ハ云フニタラス。茶ノ湯歌ノ道ニマテ立交
リケレバ。文武兼備シタル者ナリト。昔ク人モ云
ハナレケリ。南部常々是ヲサシ。片腹イタキ長
原カ物知リ顔ノ功者ダテ。辨舌コソ達者ナラメ。
敵ニ逢テノ早業ハ。何トテ其ニ及ブベキ。天晴先
ハセサセシ者ヲ。陰辨慶トハ。アノ法師ガコトヨ
ナンドト。口ニ任セテ惡口セリ。長原又傳へ聞テ。
謂レガル南部ガ廣言カナ。渠ガゴトキ匹夫ノ勇
ハ。鏡一本ノ働キニテ。大功ヲナスコトナシ。何ゾ

以テカ。墓々レキ用ニハ立ベキト。互ニ白眼ニ合ニケリ。

小松城人質 附南部為討實寶院事

然ルニ此度ノ人質ヲ南部ニモ出スベシト觸送リレカバ。無右衛門聞テ某ハ妻女モナク。又親族トテモ候ハズ。若太夫一人持候ヘドモ。是ハ此度ノ合戦ニ。武勇ノ誓古ヲ致サセタク候。人質ノ儀ハ御免アルベク候。某ゴトキノ勇士ノ野心ナシトアル者ニテハ候ハズ。御氣遣ヒナサレ候ナト。廣言吐テ返シケル。斯テ南部エセ推テ廻ラシ人質ノ裁判ハ。此此軍法ダテヲスル。實寶院ト云

フ陰辨慶目ニテゾアルラン。レヤツガ直中ヲ刺通シ。早ク此世ヲ追放シ。修羅道ノ軍法セサスベシト。獨言シテ長原ガ宿所ニ行向ヒ。案内ヲ云ヒ入ル。折節實寶院松雲ハ髮ヲ剃テ居タリケルガ。南部ガ早晚ニナキ今日ノ音信心得ガタレト思ヒケレバ。人ヲ出シテ。松雲ハ他出仕リ。宿ニ居申サズ候。御用ノ儀モ候ハバ。仰置ルベシト云ハセケリ。南部聞モ敢ズ。ヨシク他出セラレナバ。其先ヘ行テ。直ニ對面スベシトテ。ツト走り入テ。障子ヲサフト押開キ。松雲ヲ真仰キニ打倒シ。胸板ニ乗カハリ。脇指ヲズハト拔キ。心下ヲ突ントス。松雲

ハ元来大カソ大法師ナリ。南部ハ小男ノ瘦武者
ナレハ。小腕カサヲ無手トツカ廻マ。脇指ヲ打捨ル。南部ハ
カ解トリタレドモ氣逸ハナル男ナレハ。此法師目ツ
レヲ。腹コ殺シテモ捨ン者ヲト思ヒ。既ヤニ喰ヒ付ニト
ス。松雲モ心キハタル法師ニテ。チヤクトウツア
キケル程ニ。喰ヒハツレテ鼻ハツラニ喰ヒ付ルリ。松雲
モ叶ハビト思ヒケレバ。即等共ヲ呼コントレケル
ガ。元来喘息病ニテ。常サヘ舌ノ出サリケルニ。増シ
テ急ナル所ト云ヒ。南部ハ胸ハノ上ニ乗カ、リ。胸ハ
板ヲ強ク押ス程ニ。舌ハ出ス。ツフくとノミ云テ。只
息スル計リノ風ハ騰ナリ。即等共聞ツケ走り来リ。

南部ガ小腕ウチニ二三人取ツキテ。先ツ双ツ方ヘ引分ケ
リ。松雲ハ鼻ハヨリ口ノ中ノ願ノ下マテ。血ニマミレ
ナガテ。遺恨モナキニ係ルムサクサ者ト寄リ合テ。
命ヲ捨ルハ不カ覚ナリト思ヒ。却テ理ヲトキ聞セ
教訓シテ。南部ヲハ飯レケリ。大將長重此コトヲ
傳ヘ聞ク。ツカレクハ思ハレツレドモ。籠城ノ最中
ニテ。一人モ大切ナル折ナレバ。當座ノ批判ハナ
カリケリ。其後浅井勝ノ合戦ニ。南部ハ江口カ居
タル。浅井山へ登ホラント。己ガ手ノ者ヲ引具シ。敵
中ヲカケ通リ。難ナク江口ヲ見次キタリ。其トキ
長原松雲ハ。江口ガ手モナキハ。只今敵ニ

返サレ。一人モ残ラズ討レナン。是ニテ待ウケ一
勝負スベシトテ。一番手ノ軍勢ヲ。ヒタト押へ置
ルニ。敵兵江口ニ切り立ラレ。長重道討ニシ。玉ヒ
レカバ。松雲ガ軍略徒ゴトハナリ。手持アレクヤ
思ヒケン。其後小松ヲ立退キテ。軍法ヲ止武功ノ
沙汰モ取置テ。紀州ニ下リ。淡野家ニ仕へ。五百石
ノ食祿ヲ得テ。仰ノ者ニゾナリニケル。彼ムサク
サ男ノ南部ハ。始メヨリ二千石ヲ減セズ。国々ヲ
廻リレガ。加増ヲ與へテ。留タク思フ人々多カリ
シカドモ。某ハ立身ノ望ミナレトテ。止住スルコ
トナシ。武勇ノハヤル処ニハ。三年マテハヨラヘ

ケリ。斯テ人質共モ相スミシカバ。追手搦手狭間
クバリシテ。軍勢ノ手ヲ分チ。士卒心ヲ一ツニシ
テ。必死ト思ヒ定メ。當城ヲ墓所トシテ。養名ヲ後
代ニ残サント。互ニ勇ミ合ヒシカバ。如何ナル多
勢ヲ以テ攻ルトモ。容易ク落城スベシトハ見へ
サリケリ。



